

(1) 「この家は小人のじいさんと女の子だ。どっちから片づけようか」光のつて来た原子人間  
ブラックバードは考えていましたが、「よしッ、小人から先にしよう」

(2) 小人ハカセは一心に本をよんでいました。バードがコツコツとさかいのドアをたたくと、  
「だれじゃな、ミドリかい？何か用かね、あけておはいり」

(3) 「あ…君は」「オレは原子人間だ。小人じい、かくごしろ」「ほほう、おそろしいことをい  
うね。まアおはいり」「うぬッ」とバードは、短剣をひきぬいて、

(4) 「かくごしろ…あッ、ウーン」小人老人の体から、何のしかけかデンパのようなものが出て、  
近寄るバードはピリピリとしびれます。「どうしたね、原子人間くん」

(5) 「仕方がない。こいつだ」元のへやにとってかえすと、ブラックバードはミドリをつかまえ  
ました。「あーッ、先生」「来い…」

(6) ヒュー、パパーッ。山の小人ハカセの小屋から、ブラックバードはひとすじの光になって  
ミドリをかかえてとびさりました。

(7) 「しまった、わしはデンバイスに坐っていたから原子人間が近寄れずに助かったが、あの少  
女をさらわれた。よーし、助けにいつてやろう」

(8) そばのスイッチをスツと押すとジジー、ジー、ゴーこの小屋の地面がふたつにわれて、  
中から空飛ぶキューが出てきます。

(9) 「これにのって原子人間をついせきするのだ」小人ハカセは空とぶキューにのりました。キ  
ューはたちまち

(10) 大空にうかびあがりました。ヒュー、ゴゴー、クルルルーン。と、海の方へとんでいき  
ます。

(11) そのころ、海の中のハナレ小島のブラックバードのそうくつでは、電気ジシャクにすいつ  
けられてうごけぬロボット太郎と、とらえられたミドリを前にして

(12) ブラックバードがトクイになって「やい、お前はあの小人ハカセのマゴか、それともデシ  
か、いえ」「しりません」「何、知らない。おれをバカにするとひどい目にあわせるぞ」